



ブラック・ジャックに憧れ、
30代半ばで才能を開花させた
心臓外科医の素顔とは？



週平均8〜10例の手術をこなす

月曜日の午前10時過ぎ、金大附属病院の4階は慌しい空気に包まれた。手術用の着衣を身にまとい、足早に行き来する医師や看護師。器材、薬品を載せたキャビネットが次々と手術室へ運ばれる。

「毎週、月、水、金曜日が手術の日になっています。きょうは心臓の弁形成手術。どうぞご覧になってください」。金大附属病院の心臓血管外科長、渡邊剛教授がこう促した。

手術台の左右には執刀医や助手、看護師など5、6人が陣取り、手際よく準備を進める。周囲にはパソコンやモニターに最新の医療機器。デジタル時計が麻酔時間と手術時間を刻む。

いつの間にか音楽が流れていた。患者の不安を和らげるために好みの曲をかけるという。

「先生、心臓が肺に癒着しています。どうしますか。反対側からメスを入れますか」手術室に緊張が走る。

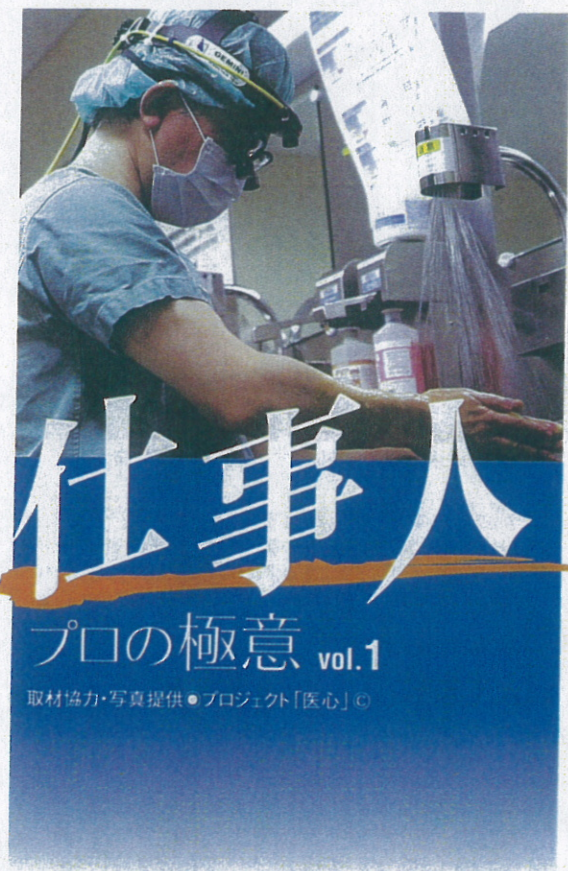
「大丈夫だ、それでいい」と冷静沈着な渡邊教授。この日は同じフロアに3カ所ある手術室で、ほぼ同時に手術が行われていた。渡邊教授は第1、第2手術室を行き来して直接、執刀し、ときばきと指示を出した。

毎週、金沢と東京を往復しながら8件から10件の手術を担当する。しかも外来の対応と回診に講義や会議、論文執筆をこなしながらだ。とんでもないことをさりげなくやっつける。これが心臓外科の世界的権威、渡邊剛の日常である。

神の手が導き出す 99.7%の成功率

世界に例のない難手術をいくつもこなした技は「神の手」「天使の手」と呼ばれる。1993年には日本で初めて心拍動下で、すなわち、心臓を動かしたままで冠動脈バイパス手術を成功させた。

心臓の表面を走る冠動脈は心筋に酸素や



金沢大学大学院医学系研究科 心肺・総合外科教授
東京医科大学 心臓外科教授

渡 邊 剛

栄養を送る重要な血管である。動脈硬化などによって冠動脈が狭くなると狭心症、詰まると心筋梗塞となつて生命にかかわる。

そうした事態を避けるために、冠動脈の狭くなった部分を迂回するように直径1・5―2・0ミリぐらいの血管をつなぎあわせて血流を維持するのがバイパス手術である。

高度で緻密な技術が要求されることから、心臓を薬で一旦止めて、人工心肺装置を使うのが長らく常識とされてきた。

「心臓を止めて行う手術は患者さんへの負担が大きく、術後の合併症を引き起こす可能性も高くなる。それをみんな何とかしたいと思っていました。しかし、人工心肺を使わない手術の難易度は格段に高くなるし、学界ではタブー視されていたから叩かれました。現在では、およそ7割が人工心肺を使わない手術になっています」

手掛けた症例は3000を越える。手術の成功率は99・7%。世界最高水準の高さである。

医局の神棚に手を合わせ、手術に臨む

渡邊教授は心臓を止めない冠動脈バイパス手術を完全に内視鏡で行うことにも成功した。さらに全身麻酔を使わず、術後の回復が早い局所麻酔を用いて、患者が目覚め



医局に置かれた神棚。手術前は必ず手を合わせ成功を祈る

PROFILE

わたなべ・ごう／1958年、東京都府中市生まれ。1989年、金沢大学医学部大学院修士課程修了後、ドイツ、ハノーファー医科大学に留学。その後、金沢大学、富山医科大学を経て、2000年9月、金沢大学医学部附属病院、心臓血管外科主任教授に就任。2005年から、東京医科大学心臓外科の教授も兼任する。現在、妻と五人の子どもを東京に置いて金沢に単身赴任。趣味は、クルマのレストア。「生来の手先の器用さを生かして部品まで自分でつくる」メカニニアでもある。

たまま行いう「覚醒下冠動脈バイパス手術」でも注目を集める。近未来医療機器として期待を集める手術用ロボットでは国内屈指の実績を持つ。

前例のない手術に挑むときは渡邊教授流の鉄則がある。知識と腕はあるか。細心さがあるか。万が一の事態に対応するセーフティーネットがあるか。「この四つをクリアしてから始めます」。

そして欠かせないのが第六感である。

「第六感が働いて何かあるなど予測できると、神様がほほ笑んでくれる。事が起こってから気付くのと大きな違いです」

手術室に入る前には必ず医局の神棚に向かって手を合わせる。人間の想像を超えた領域では、いつ不測の事態が起こるか分からない。見えない力が後押ししてくれることも現実にあるという。

生まれも育ちも東京・府中市。難産で生まれたこともあって幼少のころから体が弱く、よく病院に通った。「自分を助けてくれるお医者さんが頼もしく見えたのでしょうね」。手先が器用で工作好きの少年が外科



医の道を意識したのは麻布中学校のころ。
「心臓を語る」という書物を読んで「動いている臓器に生命の根源を感じました」という。

医学部を目指した予備校時代、さらに衝撃的な本に出会う。手塚治虫氏作で、神業の天才外科医が主人公のマンガ「ブラック・ジャック」だ。「ブラックジャックのヒューマニズム、自分の手で命を救う。そんなところに惹かれました。それからは心臓外科医、一本です」。

人生の師と出会って開花した 天賦の才能

「歴史のあるところがいい」と選んだ金大医学部。大学院医学系研究科を経て歩み出した心臓外科医のスタイルを決めたのは師と仰ぐ二人との出会いである。

一人は神奈川県の大船共済病院（現・横浜共済病院）で心臓血管外科部長を務めていた故・田中信行氏。日本で最初に心臓移植手術を行った札幌医大の和田寿郎教授の第一助手を務めた人物である。田中氏は毎日、「男っちゅうもんはなあ…」と語って聞かせた。いわく「男は舞台を自分でつくって、そこで自分で歌い、舞う。そして自分で幕を引くんだ」「患者のために、とことん技を磨け」…。

その師匠から「欧米で日の丸を背負って



技を磨かないと一流にはなれないよ」と言われて留学したドイツのハノーファー医科大。そこでもう一人の師匠、ボルスト教授と出会った。

自分の思う通りに助手が動かないと即刻クビを言い渡す。プロとして仕事をしつかりやることが一流の外科医になるための基本であると教えていたのだろう。当時は世の中にこんな厳しい人がいるのかと思うほど怖かった。

ボルスト教授から学んだのは外科医には尊厳と品格が欠かせないということである。人間としての品格や尊厳。英語で言う「デイグニティ」を渡邊教授は医師という職業に求められる資質の一つにあげる。それは渡邊イズムとして、後進たちにも受け継がれている。

一生懸命やらないのは大嫌い 全身全霊で取り組む

毎年、夏休みに少年少女に手術を見せる機会を設けるのもわけがある。

「尊厳や品格は育った環境の中で養われます。命の尊さや医師の仕事の素晴らしさを損得勘定が芽ばえる前に見てほしい。病める者を癒やす医師の仕事に、純粹に感動して、そこから何かをつかんでもらいたい」

一生懸命やらない人間は大嫌いだ。

「手を抜いたり、やるべきことをさぼって

いると厳しく怒ります。うちを頼って来た人のために全身全霊で取り組み、元気に自分の足で歩いて帰ってもらおう。これがぼくらの仕事です」

理想は患者の負担が少ない日帰り手術。すべては患者のため。何をするにしても患者が不利にならないように考える。心臓外科のプロの極意がそこにある。

